



全国自問教育の会

EOSA Education of Self-Asking

発行日：2016（平成28）年 8月 31日 No.9

発行者：全国自問教育の会（会長：小林愼一）

編集：自問教育の会事務局（丸山 斉藤 白澤 吉川 片岡 新津 北村 松島 市川 牧）

事務局：長野県塩尻市大字大小屋61番地 塩尻市立塩尻中学校内 丸山博

連絡先：Tel.0263-52-7852 fax0263-51-1600

URL：<http://jimon.3zoku.com/>

問い合わせ先：<http://jimon.3zoku.com/php/sformmail.html>

「自分探しの旅」と自問清掃

自問教育の会会長 小林愼一

自問清掃の実践が僅かずつではあっても全国に広がっている姿が見られるようになり、今全国で実践されている取り組みから学ばせていただくことで、私自身も、子どもたちとともに活動してきた日々を振り返り、反省する機会となっている。一方で自らの実践を振り返るとともに、子どもたちが自身の心を磨く行為を体験することで人間としてのどのような力を身につけていくのだろうか、また心を磨こうとしている子どもをどう受け止め、どう道を開いて行ってあげたらよいのだろうか、と改めて考えられる機会ともなっている。

小学校の担任をしている頃、卒業して中学に入学した教え子が、ひと月ほどたったころ、小学校の私のところへ近況を話しにきたことがあった。当然とも言えるが中学の集団は自問清掃を体験した子もしなかった子も交じったの新しいスタートになることは分かっていたことである。子どもの近況報告の中身は、「ほかの学校からきた(入学してきた)人は、時間中、ずっとしゃべっているよ。先生が見回りに来るとやっている振りをするんだよ。」

「(小学校の時一緒だった)Aちゃんは、小学校

の時と全然変わってしまったんだよ。」ということだった。私は、「ところで、周りの友だちのことは分かったから、君はどうしたいの。どうすべきだと心に決めたの。」「いろんな人がいることが分かったよね。その中で自分はどうしたいのかを自分の心に聞いて生きていくことが大事だよ。」と、ちょっと大人になり、自分探しの旅をし始めた子どもに向かって答えたのを覚えている。

私は事前に中学校に自問清掃をやってほしいなどとお願ひしたことはなかった。私の自問清掃の取り組みは、あくまで私とそこにいた子どもたちとの営みなのであり、私自身が子どもを信じて行ってきたものであるから。

自問清掃のプログラムを子どもに教え、子どものマイナス面を捉えてその体験の方法を取り組むことは容易であるが、先を生きるものとして自分自身が自問自答し、どう生きていこうとしているのか、子どもはその姿を見て自分も自分探しの旅を続けるのであろう。

今年も、自問教育の会にたくさんの実践を全国から持ち寄っていただき、自問清掃と人間の成長について大いに学びあい、語り合いたいと楽しみにしています。

第25回全国自問教育の会開催

長野県塩尻市立塩尻中学校

11月25日(土) 26日(日)



自問教育に取り組まれている全国の先生方に、ご挨拶を申し上げます。

このたび、長野県塩尻市立塩尻中学校で全国大会が開催されますことは大変栄誉なことと思っております。ありがとうございます。本校は、特別な教育を行っている学校でなく、ごくふつうの学校です。毎年生徒の実態を見極め、前年度の反省に立ちながら、生徒の健全な成長を目指して、学力や体力の向上、人間性の向上に取り組んでいます。

何年か前は、生徒たちがなかなか落ち着かずに、授業・行事・生徒会活動等への集中度が高まらずにいた時期もありました。そんな学校の改革を考える中で、何人かの先生方を中心に「自問清掃」の取り組みが始まり、大きな成果を上げています。『自分を深く見つめる』という姿勢は、多感な中学生期の生徒にとっては、大変意味のあることです。

当日は、道徳の授業を参観していただきますが、子どもたちがどれだけ自分を見つめることができるか、私も楽しみにしています。そして、先生方のお考えをお聞きして、今後の学校運営の一助にさせていただきたいと思ひます。どうぞよろしくお願ひいたします。

長野県塩尻市立塩尻中学校
校長 柳生 高広

会場校より

1 塩尻中学校でのスタート

「生徒たちに自主性を育てたいのですが、どうしたら良いのでしょうか。」

一昨年の1学期の終わり頃、初めての学級担任をしていた丸山真由美先生（現諏訪市立城南小）が、「生徒たちがひとつひとつ指示しないと何もやらないのです。自主性を育てたいのですが、どうしたら良いのでしょうか。」と相談にきました。

私は「いろんなやり方があるだろうけれど、自分は自問清掃という方法しか知らないよ。」と答え、資料を提供しました。しばらくすると、「2学期から自問清掃やります！」とのこと。「え?! ちょっと待って! そんなに簡単なものじゃないかも～」ということひとまづストップをかけました。

でも、その先生の一言で一気に学年が動き始めました。偶然にもその学年の学年主任と副主任は以前に自問教育の会の研究会に参加したことがありました。また、初任校で自問清掃を経験している先生もいました。偶然とは恐ろしいものですが、そういうものなのかもしれません。結果的に一昨年の11月から塩尻中学校1学年の自問清掃「心磨き清掃」が始まったのです。

2 学年黙想から説話・振り返りの時間に

塩尻中学校には「学年スペース」という150名の学年生徒が集って集会できるスペースが各階に用意されています。もともと生徒指導面で困難を抱え、掃除の取り組みも課題が見られる実態を何とかしたいということから、掃除の時間の前に学年全員が集合し、黙想してから掃除を開始するようにしていたようです。その成果についてはここでは触れませんが、掃除の前に学年生徒が集合するという習慣がありました。

この時間を使って、生徒たちの作文を紹介しながら目指すべき人間像に関わる説話をし

たり生徒たちの振り返りを促したりするよう
にしてのんびりと進めています。

3 学年で道徳の授業？！

開始して1か月ほど経つと、心磨き清掃に
楽しさを感じてくる生徒、指示・命令・見回
りがないことをいいことにサボる生徒、おしゃ
べりをがまんしようという意識がなく話し続
ける生徒・・・と分かれてきました。

すると、どちらかという掃除に前向きに
取り組む生徒たちの中にイライラ感が生まれ
てきます。そのイライラ感が心磨きノートに
表出しはじめたので、授業をしくんでみたら
どうかと提案したところ、学年で授業をして
もらいたい！という学年主任の無茶振りによ
り学年授業というのを実施することになりま
した。

あまりにも生徒数が多く、机間指導をして
指名計画をたてて・・・ということができず、
出たところ勝負の難しい授業でした。

4 揺さぶりをかけながら、どんな反応 をするかワクワクしながら待つ

暑いからなのか、聞きたくなるようなお話
ではないからなのか、早く掃除を始めたいか
らなのか・・・思いはそれぞれなのだろう
が、掃除前の話を聞く様子に求めるものを感

じないと思えば、思い切って「聞きたい人だ
け聞けばいいよ」「自分で決めていいよ」と
してみたこともあった。

今年の7月には、他学年の宿泊行事中に他学
年の掃除場所まで自主的に掃除する姿が多く
見られたので、分担をなくす提案をして何日
もかけて話し合った。結果的に提案は却下さ
れたが...

5 全校で心磨き清掃に取り組みたいと 考えた美化委員長・副委員長

ここ数年、1学期と2学期に生徒会の美化委
員会の企画で全校縦割り清掃に取り組んでき
た。今年度の1学期にも実施したが、今年度は
縦割り清掃に加えて、普段心磨き清掃に取り
組んでいない1・2年生にも心磨き清掃に取り
組んで欲しいと委員長、副委員長が願い「心
磨き清掃週間」も行っています。

現在の3年生だけで取り組んできた「心磨き
清掃」ですが、実際に子どもたちの様子をご
覧いただき、子どもたちの姿を通して語り合
うことができれば幸いです。塩尻は、古来よ
り交通の要所として栄えたところ。豊かな
自然、新鮮な野菜、美味しい塩尻ワイン、山
賊焼き・・・もございます。是非、信州塩尻
へお越し下さい。お待ちしております。

事実

2年生が3日間いなかった。
理由は様々でしょうが...
やっていないところ、汚れていると
ころを見つけ、2年生の分担場所
まで掃除した。
自分で考え、自分で判断して行動
する。そんな人が大勢いた。

仮説

ならば・・・分担なんて決まっていなく
ても、
一人ひとりが考えて、一人ひとりが
判断して行動できれば、掃除できる
のでは？

提案

今3年生で取り組んでいることは、
心磨き清掃です。
心を磨くことが最大の目標なので、
より心を働かせて心を磨くことがで
きるのならば、分担をなくしてみは
どうでしょうか。

実践者の声

自問清掃への想い

茅野市立長峰中学校 小椋 純也

「清掃の時間は無言。無言で取り組むなかで、校舎がきれいに磨かれ、他の様々なものが見えてくる」・・・そう信じ、初めて担任した学級から清掃指導に力を入れてきました。濱口國雄さんの「便所掃除」、ニューヨーク地下鉄の「ブローケン・ウィンドウ理論」、そして鍵山秀三郎さんの生き方等、様々な資料を使って授業したり、学級通信に載せたりしてきたつもりです。私自身も、率先して清掃に取り組みました。しかし、無言清掃が保てたのは良くても1ヶ月。清掃中に少しでも話し声が聞こえる学校では、3日も保てれば良い方でした。そして私が一番切なかつたことは、「賢い生徒ほど、掃除はしているが上手に手を抜く」という現状でした。もちろん私の考えに共感して一生懸命清掃に取り組む生徒もいます。でもその生徒たちは、元々清掃をきちんとできる力の持ち主であつたように思えます。自分の授業力不足、指導力不足を真剣に悩んでいたとき、自問清掃と出会いました。偶然にも、自問清掃を実践されている先生が校内にいたのです。

私の学級と対称的に、自問清掃をしているその学年は、日が経つにつれて真剣に、生き生きと清掃に取り組むようになってきました。気になる場所を見つけてきれいにしようとする姿（気づき・自発性）、大変そうな仲間を自然と助ける姿（思いやり）は、当然ながら学校生活の中にも現れてきました。当時の私は、それを不思議を通り越して怪奇現象ようにすら捉えていました。そしてもう1つ偶然がありました。夏休みに帰省し、実家の古い本棚を掃除しているとき、古くて黄ばんだ薄い本の題名が私の目に飛び込んできたのです。竹内隆夫先生著の『自らに問うということ』でした。

自問清掃の項を開くと、そこには竹内先生

が清掃指導をどのように進め、自問清掃に至ったのかが書かれていました。当然ではありませんが、竹内先生は、私の実践よりも遥かに力強く、多種多様な手法で、粘り強く清掃指導をされていました。私が実践したこと、これから実践しようか悩んでいたこと、私が考えもしなかつた手法まで書かれていました。しかし、竹内先生はその全ての手法で失敗(?)されていました。私が生まれるより前に発刊された本です。私は預言書を見ているような感覚に襲われてしまいました。

その後、自問清掃を私なりに勉強し、2校目の学校で初めて実践してみました。「竹内先生の本の内容は難しいから、別の言い方で説明しよう」等と試行錯誤しましたが、どうもしっくりきません。結局、竹内先生の表現方法に落ち着くことが幾度もあり、その度に自問清掃の考え方の、洗練度の高さや奥深さに驚かされました。また生徒の感想文から教えられることも多くありました。「今日、気になっている汚いところをはじめてきれいにしました。」この一言が本当に嬉しかったのです。また、ある生徒は「自問清掃ができていと感じているときほど自問ができていない」と書いてきました。まるで私の心が見透かされているかのようで、自問清掃の初心に返るきっかけになりました。

現在赴任している学校は4年目になります。生徒会で無言清掃に力を入れていることもあり、初任校のような無言清掃方式で1学期行ってきました。するとやはり「先生がいないと喋る」「掃除をやっているようで上手にサボる」という行動が蔓延してきました。これを見て最近、「無言清掃などの清掃指導を対処療法とすると、自問清掃は自然治癒力を強くする方法に似てるのではないか」と感じています。そんな話も織り交ぜつつ、今年も自問清掃に挑戦しようと決心したこの頃です。

自問清掃と教師の成長<第2回>

全国自問の会理事 橋口有康 (石川県)

私と出会い自問清掃にかかわってくれた教師たちの振り返りを紹介します。この作文は、私が教師生活を終えるにあたって書いてもらったものです。それぞれの自問清掃に対する考え方、思いが綴られています。本来ならば、私の退職記念として書いてもらったものなので、他の人に公開するものではないのですが、これから自問清掃に取り組んでいこうとする皆さんの助けになればと思い公表しました。それぞれの先生方の自問清掃との出会いを通して、教師として一人の人間として生徒とどのようにして取り組んでいったかを知ってください。

M教諭

私が自問清掃に出会って、早くも6年がたとうとしている。光野中学校時代に初めて「ジモン」という言葉を聞いたときは、全く何のことやら、という感じだった。校長先生の命令で、S教諭、Y教諭、T教諭が視察に行き、「何やらすごいものだ」という話を聞いても「そんなものが光野中でできるはずがない」と考えていた。当時の掃除といえば、スカートをぬがない、雑巾がけをしない、しゃべってばかりいる。そういう生徒たちを怒鳴りまくり、罰を与え、とにかく全員に平等に係分担任をして「やらせる」ものだった。生徒を監督し、目を光らせ、すみずみまできれいに「させる」ものだった。だから、初めて「叱らない、ほめない、比べない」という自問の話聞いたときは「そんなことをしたら誰も掃除なんかしなくなる！」と思った。導入の前の年の忘年会の3次会、皆で「やるべきだ」「いや無理だ」と熱く議論をしていたことが懐かしく思い出される。実際に自問に触れてきた人以外は反対意見が多かった。

しかし、次の年、自問清掃は導入された。しぶしぶ読んだ「魔法の掃除13カ月」という本は、夢のようなことが書いてあったが、

中学校で、しかも荒れている光野中では絶対うまくいくまいと私は思っていた。しかし、・・・。「叱らなければ誰も掃除なんかしないだろう」という予想は覆された。雑巾もほうきも、ちゃんとやる生徒がいたのである。「だれも掃除をしなければ、教師がやって掃除を終わらせるしかない」という悲壮な決意(?)は杞憂に終わった。光野中では2年間、自問清掃に取り組んだが、1年目の受け持ちであった3年生は「なぜ自問をしなければいけないのか」というところに引っ掛かりがあったように思う。理屈ではわかっても感情的に抵抗を感じている生徒が少なからずいた。しかし、2年目の1年生になると、入学時からオリエンテーションを行ったせい、こちらが驚くほど黙々と自問に取り組んだ。大きな声を出さなくても、係分担任を決めなくても、黙々と掃除が進んでいく。しかも隅々やチョーク受けなどを自分からふいている。この生徒たちの様子は自分にとって本当に驚きであった。しかし、一番驚きだったことは、自分が変わったことであった。それまで机の上げ下げを手伝っても、雑巾がけはしたことがなかったが「教師も自問をする。」という自問清掃では立って見ているわけにはいかない。自分も雑巾を絞り、生徒と一緒に雑巾がけをした。棚の上や戸のレールなど、今まで絶対ふかなかったところを見つけてふいた。自分にとっての「掃除が」「やらせるものから」「やるもの」に変わっていった。そういつた中で2年がたち、私は校長先生と一緒に野々市中学校にやってきた。野々市中の掃除は、昔ながらの掃除であった。野々市中に来てから、自問清掃が導入されるまでの半年間の掃除は本当に苦痛だった。「自問をやるのは大変だ。」という頭があったが、「自問をやることの方が大変だ。」と思った。自問のすごさがわかったのは、このときだったような気がする。

もし、「自問」に出会っていなかったら・・・。と考えて見る。私は何の疑問も持たず、掃除を「やらせ」続けていただろう。私にとって自問との出会いは、それまでの掃

除に対する考え方を180°変えさせられるものであった。

自問の優れている点について述べたい。

- ・強制しない、自分で考えて動く、というスタンスは、中学生の発達段階に適している。
- ・成長できる生徒は、どんどん自分で成長している。
- ・掃除の時間が喧噪の時間にならない。
- ・学校がキレイになる。
- ・掃除に対する教師のストレスが軽減される。

課題について述べたい。

- ・成長しようとしなない生徒たちをどうするか。
- ・自問には「水やり」が必要だが、ついつい怠ってしまう。
- ・惰性で掃除をしているようになり、教師も生徒も、本来の目的を見失いがちである。
- ・教師が自問についての疑問や意見をぶつけ合う場の確保が難しい。

今後も野々市中で自問を続けていくためには、教師側の共通理解と、新しい校長先生の意志が必要となる。教師側に乱れがあれば、自問清掃は簡単に崩壊してしまうかもしれない。自問の火を絶やさないためにはどうしたらよいか、これから自分なりに「自問」していきたい。

Y教諭（生徒指導主事）

3年前本校に赴任し実際に自問清掃に取り組んだ時に戸惑いがあったことは確かです。若い頃の清掃時間は面倒な時間であったものの、ある程度教員としての年月を過ぎると生

徒との楽しいコミュニケーションの場になっていた。清掃の美しさももめつつ、ある程度の妥協の中で思いやりや協力、責任感と充実感を味わわせながら成長する姿に、教員としての楽しさを見出していたのだと思います。ところが、指示はしない、叱らない、しゃべらないなど今までの方法と大きく異なるところに戸惑いがありました。

担当場所が体育館ということもあり、最初に少しだけ生徒と共通理解を図り取り組むことにしました。

生徒の意見には「自問清掃は指示しないのではないか」「何をやってもいいのではないか」「座って見ているでもいいのだ」などありましたが、究極の自問清掃とは何だろうと一緒に考えました。それからの体育館の自問はスムーズに取り組めると同時に自問ノートの内容にも変化が現れました。

「自問清掃は我慢することに意義がある」もともと我慢が好きではない私にとって、物事を我慢から始めるのに違和感があり、自分の中での自問清掃をどう理解するかを考えました。自問清掃と生徒指導の3機能を考えるとき、自己決定のない自問はなく次の段階では他者に気づき共感的関係にもつながる、そして清掃活動をすることで自己存在感にもつながると考えました。さらに今年（25年度）の卒業生と関わる中でN教諭とのテーマは「いかに困難を楽しむか」でした。そう考えると自問清掃に取り組む中で我慢を楽しむことを学んだのかもしれませんが。今後は生徒指導の3機能とも連携し「我慢」を「我慢」にかえるよう取り組んでいきたいと思います。

<次号へ続く>

自らを高める自問教育

の手引き



竹内隆夫先生

新たな発想による清掃活動

—人としての成長を願って—

竹内 隆夫 著

〈目次〉

すいせんの言葉（第4号掲載）

1. 実践の場こそ（第4号掲載）
2. 紆余曲折を経て（第5号掲載）
3. 自由とは迷惑をかけないこと“人の痛みがわかる”（第6号掲載）
4. 心を汲む気働き“人の心がくめる”（第7号掲載）
5. 創造と発見“人のねうちがわかる”（第8号掲載）
6. 感謝の心で“自分との違いが許せる”（第9号掲載）
7. 正直ということ“胸に自分なりの尺度ができる”
8. 教師のあり方
9. 理念の背景

あとがき

（まとめて読みたい方は、事務局までお問い合わせください）

6 感謝の心で

指導要領では清掃を特別活動という中に位置づけています。そしてその目標には今も、「働くことの喜びを」云々と示されています。皆が働くことを愛し好む国民になれば、どんなに楽しいことでしょうか。このように立派な目標を示すことは簡単です。

しかし私達成人の働いている姿を見た時、その作業を愛し好んでいるように見えるでしょうか。泥まみれになって農作業をしておられるお百姓さん、油にまみれて機械をあやつる工員さんなど、その働いている顔に愛し好んでいるようだなあ—と思われる表情があるでしょうか。誰も、「そりゃ無理な話だよ」と思うでしょう。生活の糧のためか、家族を養うためか、そ

のほとんどが、苦しみにも耐えて働いておられるように見えるでしょう。働くことの喜びなどと簡単に言えるものなのか。いったい勤労を愛好する姿とはどんな状況をいうつもりなのでしょうか。

筋肉を動かすから楽しいのでしょうか。それも長ければくたびれます。汗をかいた後さっぱりするからでしょうか。それも仕事そのものの楽しさではないらしい。幼児に初めて雑巾をかけさせると珍しがって喜びます。廊下でぶつかるどじゃんけんをして負けた方はよけたりして楽しそうです。しかしあれは遊びの楽しさです。勤労の楽しさではないらしい。広い世の中のこと、どこかに楽しそうに働くおとなが居るかもしれない。そう思っていた頃、ひとつだけ見つかりました。

それは私が先輩に従って禅寺で座禅をした時

です。掃除の時間になると僧侶の皆さんが実に明るい表情でいそいそと働かれるのでした。「この人達は勤労を愛好していらっしゃる」と見たのです。そして私もしばらく生活を共にしてわかりました。お坊さん達は自分が修行する僧堂に深い感謝の気持ちを抱いて働いておられる—ということでした。

もし働くことの中に喜びをみいだすとしたら、まずその前に感謝の気持ちを持つことが前提条件だとわかったのです。その心で働く時始めて心も清められ、精神性を高めることができると思いました。つまり働く前に心のありようを吟味することが順序なのです。

これまでの段階にはそんな考えは含まれていません。がまんもやる気も人の心を汲む気働きも、また新たな仕事の発見も、すべて目は外に向かっています。こんどは目を内に向けて感謝の気持ちで働けるかを自問しなければなりません。自問と呼ぶにふさわしいのはこの第4段階からということです。僧堂への感謝というお坊さんと比べれば、私共は校舎や校庭に感謝の思いを抱いて働けるか、と言うことになります。

生徒は毎日通う学校ですから、誇りにも思い愛校心を抱いているかもしれません。だが修行僧のような感謝の気持ちにはなりにくいでしょう。いったい今の日本の子供達に感謝などという気持ちはどれほど育っているのでしょうか。残念ながらきわめて低いのです。

薄れる尊敬と感謝の心

総理府が世界6カ国の小学6年生を対象に、親や教師に対する感謝の心について比較調査をしたことがあります。衣も食も最も恵まれて育っているながら、父親への感謝も母親への感謝も世界最低という結果でした。先生に対する感謝はどの国と比べてもけた違いに低く、びっくりさせられたほどでした。

どの国も親や祖先への尊敬と感謝の教育に力を注いでいたのに、戦後日本ではうっかり手を抜いていました。これが家庭内の秩序が乱れた原因と思われる。そして今もその反省は生かされてはいません。

親がわが子に向かって「私を尊敬しなさい」と言っても笑われてしまうでしょう。教師にもそれはできません。目上の人への感謝の教育は、別なおとなから説明されてはじめて気づかせることができることです。祖父母を敬う教育は両親の役目、親への感謝は教師の役目というようにすべきなのに、それを怠っていたのです。

私がある中学校で生徒に、親のありがたさの講演をしました。数日後、生徒からこんな感想文が届きました。

「私はふだん親に反発ばかりしていました。親の愛につつまれて、こんなにのびのびと育ったのに、その母を悪く言ったこと、きらいだと思ったこと、母を泣かせたことなどを思い出しますと、私は先生の顔を見ていられないほど恥ずかしい気持ちになりました。」

「今日は反省することばかりでした。お話を聞きながら、私の顔は涙でいっぱいになり、先生の顔がはっきり見えませんでした。中学生生活をこのまま終わらせてはならないのだ。親孝行を実行に移さなければ、それしか今の私にはないのだと思いました」

などと、どの手紙も親への感謝のかけていたことを強く恥じていました。このように親への思いは教師が、教師への尊敬心は親のつとめなのです。この手紙を見ながら、感謝の教育の回復こそ急務と思いました。そしてまずこのプランの中へ位置づけようと考えました。

よく働けた日は学校への感謝がそれだけ持続できたことであり、働けなかった日は、感謝が欠けた日になります。つまり、働きの量によって、自分の感謝の心の育ちが測れることになるのです。毎日お世話になっている机や腰掛けですから、きげんのよい日なら、「ありがとうよ」と感謝の気持ちで働けるし、心も成長するでしょう。しかし中にはいやいやながら働いている友達もたくさんいます。雑巾をスリッパのように足につっかけ「いやだなあ」と廊下をこすって歩く者もいました。雑巾をまるめて体育館の天井にひっかけた者もいましたし、箒を野球のバットがわりに遊ぶ者もいました。そこでまずこう提案しました。

「皆さんは誰も学校に誇りを抱き、また毎日勉強させていただく校舎に感謝の気持ちを持っているでしょう。そんな気持ちで働けば心も満たされるでしょう。けれども毎日健康ではないから、今日はそんな気持ちになれないと言う人もいます。体育でたいへんつかれていて働けそうもない日もあるし、けがをして雑巾が使えない日もあるでしょう。いやいやながら働いては心の成長にもなりません。そこでそういう日は、申しわけないが休ませてもらったかどうか。チャイムがなったらまず自分に聞いて、学校をだいに思う気持ちで働けそうなら仕事にかかる。そんな気持ちになれなかったら、心

が整うまで休んでいてよいことにしたい。心が成長しないのに働いても価値がないからです。」と。

この提案を子供達は不思議そうな顔で聞いていましたが、心を見つめるきっかけとなりました。このプランでは最初、おしゃべりをがまんする時も休ませました。再び感謝の心をたしかめるまで仕事をしないでよいことにしたのです。やがて子供達の感想文に「これをやるようになって、自分がふだん感謝の気持ちの欠けていたことがよくわかってきました」とか「はじめ、この話を聞いた時は、何だろうと思っていたけれど、自分の問いかけ、心をこめていつも使わせてもらっている校舎に恩返しをするつもりで働くということがわかってきました。この時間は自分にとってとてもためになりました」などの反応が現れました。しかし中には急に感謝などと言われてもぴんとこない生徒もいました。

先人の努力の結晶大切に

あるクラスの頭のいいK君は、毎日仕事をしなくなってしまうました。たまりかねた先生が後でそっとたずねたところ、「父や母に感謝ということならわかりますが、机や腰掛けをいくら見ても感謝の気持ちが出ないのです」との答えでした。なるほど一理あること。急に禅寺の坊さんのようにはなれません。そこで次の朝会にこんな講話をしました。「皆さんに校舎や机を見て愛校心を持ちましょうと言っても無理だったようです。そこで皆さんに昔のことを考えてもらいたい。明治のはじめまでは日本にも学校はなかった。寺子屋でお坊さんが字を教えたりはしていましたが、本当に学問をしたいと思ったら、東京や横浜にいる先生の所まで教えてもらいに行かなければならなかった。長い旅をして先生の門を訪ねても、その先生の家で炊事などをさせてもらい、わずかの時間に教えてもらえるだけでした。

それが今皆さんはどうか。学校へくるだけで専門の先生から教えてもらえるのです。しかも先生の中には、はるばる遠くから家族ともどもここまで越してきてくださっているのです。昔とは反対です。なぜでしょう。明治のはじめに、皆さんの祖先の方々が貧乏な中、金を集めて学校を建ててくださったからです。国として方針はきめても金がなくて、それは無理だと言って方々で大げんかもあったのです。皆さんが今勉強できるのは、そのご先祖のおかげなのです。こんなにたくさん学校を建てた国はほとんどなかった

のです。今も学校のない国が多く学校に行けず、ひもじい思いの子供が地球上に2億2千万人もいるそうです。日本人の人口の倍です。皆さんは幸い日本に生まれ、学校へくることは、あたりまえとっているでしょう。学校も空気のようにあたりまえだと思うからそのありがたさに気づかないのです。そう考えると目の前の机や腰掛けにも遠い祖先からの、皆さんを思う心がこもっているのです」

と話しましたら、その日からK君はもちろん、大勢がいそいそと働き始めました。

それにしても全生徒が働く姿にはしたくなかったのです。誰しも生身(なまみ)の体ですから、感謝の気持ちで働けそうもないという日がきつとあると思うのです。正直に心を見つめて休みたい日は休むことにすれば、心にその子なりの尺度が築かれると考えました。

中にはずる休みをする人がいるかもしれませんが。その場合の解決策としては、次のように説明しました。

「休んでいる友達を見て“ずる休みをしていてひどい”と疑ったとします。でもその友達の心は見えません。それよりも、昨日まで仲よしだった友達に疑いを抱いて働くとしたら自分の心も汚れているわけなので、まず自分の心を直すために一緒に座りましょう。憎んだ心が消えてから仕事にもどるがよいでしょう。きつとどのクラスにも1人や2人は心が許さないで働けない人がいるはずです。皆が働いていることの方が不自然です。心が整わないでいる人を認めてあげるクラスの方が立派だと思うのです。そして健康な人がカバーしてあげる広い心のクラスが素晴らしいでしょう」

実践は成長のバロメーター

単一民族の日本がこれから国際性を身につけるには、自分と思想信条の異なる人達をどれほど受容できるかが課題であろうと思います。休んでる人を許容できる度量が持てるかは働く側の人にとっての課題となるでしょう。また、もしずる休みをしたとしても友達の働く姿を見ている間に恐らく自ら反省し、気づくに違いありません。

一人の先生が軽い脳の病気をされた後、復帰してくださったので、その先生には働かずに職員室の小テーブルでお茶でも飲んでいてくださいとお願いしました。さてチャイムが鳴り、清掃の子供が入ってきました。お茶を飲んでいる先生を見た1人の生徒がその横へ行って腰をおろし

ました。すると次々に3人程また腰をおろしたのです。他の生徒は黙って仕事を始めました。そのうちにしばらくして座っていた生徒も心はれたのかぼつりぼつりと立って作業に加わっていきました。

この姿を見て、生徒指導に関しては、生徒も先生も区別する必要はないと思いました。こうして座る者もどる者が入れかわりながら外からの指導などまったく必要としないで、彼ら自身で心をコントロールしながら成長してくれました。生徒の感想は、

「前には自問という生き方を知らなかったから、友達を大切にできなかつた。そして仲間外れにしたりされたりしていたが、今では仲間外れもなくなり、みんなどんな友達とも仲よくできるようになった。これをやると、心がだんだん大人になっていくのがよくわかります」

「これをやりぬくことによって、クラスのまとまりがよくなるだけでなく、皆自分自身を深く見つめ直せるようになる。こんなすばらしい方法を、なぜもっと早くから始めなかつたのか。もったいないかつた。これはぜひ続けるべきだ」などというものでした。

15分の清掃中、5分しか働けなかつたとしたら、その日は残念ながら3分の1しか学校を愛せなかつたのです。15分働き続けて初めてその日は愛しぬいたのです。親孝行も、頭でわかっているつもりでも、それが行えないとしたらわかっているではないこととなります。このように、生徒達は日々自らを励ましながら、行為の中に心のあかしを求め続けました。やがて実践にこそ心の成長のバロメーターがあるということに気づく生徒になりました。

世界人権宣言の意味を

なぜ清掃中に一部の生徒を休んでよいとするのか。この疑問に答えるために中学校では次の補足をしました。

「さきに民主主義の基本は自由と平等とお話しました。今日は平等の意味を考えてみましょう。平等はたいらにひとしいと書く。いったい人間は平等でしょうか。男女も違うし、よい人も悪い人も金持ちも貧乏人もいます。それなのになぜ平等を目標にしたのでしょうか。皆平等にするなら入学試験も無くしてもよさそうです。また社長さんも給料も新入社員のも同じにしてもよさそうです。

実は世界人権宣言の第1条に“すべての人間は生まれながらにして自由であり、かつ尊厳と権

利とについて平等である”とあります。この最後の権利についてという但しがきを見落とすと意味がわからなくなるのです。子供には子供としての権利、年よりには年よりとしての権利というように、人はすべて人間らしく生きる権利があると云ったのです。ですから障害を持つ人に、健康な人と同じに働きなさいと云ってのではありません。老人についても同じです。それぞれ人間らしさという意味では等しいといったもので、むしろ、それぞれの違いを大事にしましょうと云ったのです。だから画一という言葉にしないで平等という言葉を選んだのです。

この考えを清掃の時間にあてはめるとどうなるか。病気の人や心の準備のできない人にまで無理に働かせるのではなく、それぞれに違いを認めてあげよう、ということになります。皆一斉に働きなさいという考えは画一です。弱い人を休ませてあげ、元気な人がその分をカバーしてあげる、というのが平等が願う姿ということになります。このように人間を大切にしたい思いやりのある集団を理想としたのが、民主主義のねらいであったのです。ですから、掃除でも一部の人をいたわりながら働けるようになった時、民主主義の目ざす社会になれたというわけです。休んでいる人をカバーしながら働けるまでになれば、民主主義を担う資格が身についたこととなるわけです。」

教育基本法が示すように、皆の違い、それぞれの個性を認め合い、感謝しながら働けるかどうかを吟味するのが第4段階のねらいとしたのです。別な言い方をすれば、一人ひとり他に引きずられないで、胸に自分なりの判断尺度を抱いて進む自主的な人になってほしい—ということとです。

やがて参観の方から「修行僧のよう」と見られるまでになったのでした。〈次号へ続く〉

編集後記

全国で熱心に自問教育に取り組まれていらっしゃる先生方へ、今回も無事会報をお届けすることができました。日々悩まれながらも情熱を持って自問教育に取り組んでおられることと思います。先生方の益々のご活躍をお祈りします。お忙しい中原稿をお寄せいただきました先生方に厚く御礼申し上げます。〈事務局〉